



最新の機器を取りそろえたキラメキテラスヘルスケアホスピタルは、鹿児島地区の医療を担うべく誕生した



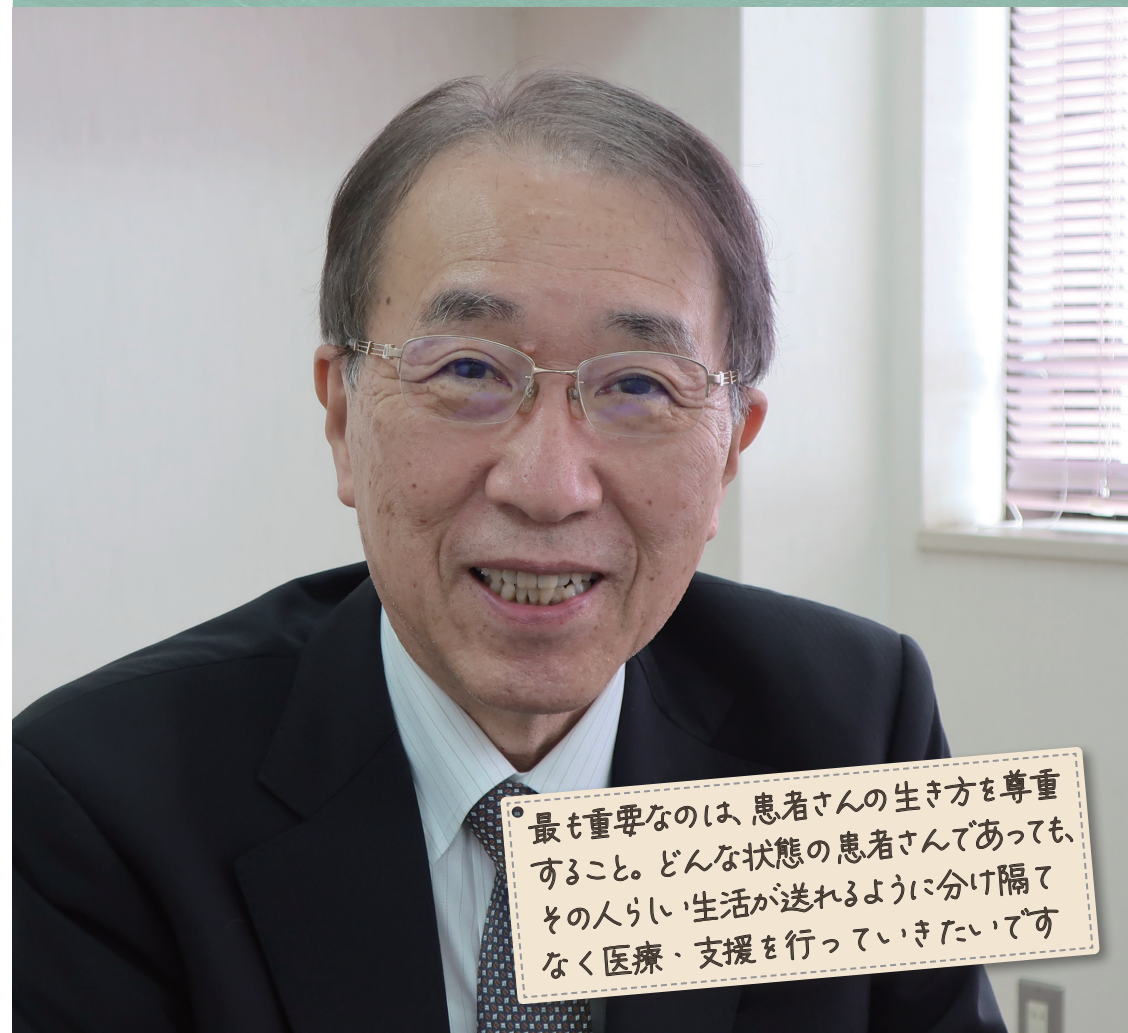
「私らしく、ここから」をテーマにジムやヨガスタジオで「ウェルネス」の実現を目指す WellBe Club

ラスヘルスケアホスピタルでは、100日間を通して、やさしく包まれる病院」というコンセプトを掲げ、回復期・慢性期・在宅・介護サービス機能の質向上を目指し、人間ドックや健康診断を行うトータルウェルネスセンターも併設されている。また、高度急性期・急性期型のいまきいれ総合病院と室内連絡通路で連結し、医療機能を連携しながら、地域住民に対し高度急性期から慢性期・在宅・介護サービスに至る「地域完結型」医療介護システムを提供する日本で初めてのモデルである。

玉昌会グループは鹿児島市とベッドタウンである始良市に密着し、絶えず変わり続ける医療や介護のニーズに 대응べく、ウェルネス（健康増進）や介護、子育て支援に健診、医療の5つの要素を総合的に提供する。未来に向けた医療環境を構築する」というグループビジョンを実現するために、玉昌会グループは様々な施設を展開している。「ウェルネス」の部分では、関連事業所である株式会社JOYが会員制フィットネスクラブ事業の運営を通じて担当。また子育て支援の部分は、社会福祉法人幸友会かすみ保育園や子育てサロン、院内託児所チエリッシュキッズルームによって担われている。介護では、鹿児島地区、始良地区両方に幅広く、様々な施設が存在している。例えば鹿児島地区には、住宅型有料老人ホームほりえ、看護小規模多機能型居宅介護麗や星の街など。始良地区には加治木温泉病院介護医療院、介護医療院おはな、看護小規模多機能型居宅介護とまり木、お福、住宅型有料老人ホームおはな別館、グループホーム花いちもんめ、木もれ日などが設立されている。

医療法人玉昌会 加治木温泉病院

院長 夏越 祥次



最も重要なのは、患者さんの生き方を尊重すること。どんな状態の患者さんであっても、その人らしい生活が送れるように分け隔てなく医療・支援を行っていきたいです

「低賞感微、の行動指針を基に
「地域包括ケアシステム」の推進を目指す

病院、クリニックや施設のみならず、地域住民全体で取り組むからこそ意味がある

そして始良地区に位置する病院こそが、加治木温泉病院だ。ここでは回復期病棟や地域包括ケア病棟、慢性期病棟を取りそろえ、リハビリ施設や人工透析まで完備。加治木温泉病院は設備の充実したケアミックス病院として、地域住民から親しまれている。

「低」…すべてに謙虚な気持ちで接する、「賞」…お互いを思いやり敬意を払う、「感」…すべてに感謝する、「微」…微笑みを添えて態度で示す、「低賞感微」の行動指針を遂行すべく、院長の夏越祥次医師は患者目線の医療提供に心を砕く。そんな夏越院長の高い志や加治木温泉病院のこれからなど、幅広くお話を伺った。

へき地・離島医療の経験が患者主体の医療に繋がる

新たな挑戦を求めて加治木温泉病院院長に就任

消化器外科を専門とする夏越院長のルーツは、救急医療に興味を持ったことから始まる。しかし夏越院長が医師になった頃は救急科という診療科が無かったため、緊急性の高い患者と接する機会が多い外科を志す。医師となって初めての出張先は奄美大島の県立大島病院だった。いわゆる離島・へき地医療の最前線。病院へ搬送される患者の病状は実に様々だった。時には他科の医師に協力を要請しながら、ほぼ毎日急患の治療に当たっていた。

「少しでも多くの患者さんを助けたいので、救急医療に携わっていました。これこそが医療の原点だという、医師として土台となる考えがこの時に出来上がっていったと思います」

やがて鹿児島大学医学部において教鞭を執るようになり、後に鹿児島大学病院院長、そして鹿児島大学副学長を兼任するまでに至った。そんな経歴を持つ夏越院長は、後進の医師に対して「一

通り全ての症状を診られるようになってほしい」と伝える。

「近頃は専門医として都会で医師をやる人が多いです。しかし、それだと患者さんが自分の抱える症状の数だけ専門医を訪れる必要があります」

若い頃から幅広い診察が求められる離島・へき地医療に携わってきたからこそ、患者目線での診察を常に心掛けていた。そんな夏越院長が加治木温泉病院院長に就任したのは2020年のこと。

「当時兼任していた鹿児島大学病院院長と鹿児島大学副学長を退任する時に、お声掛けいただきました。ちょうど何か新しいことを始めたいと考えていましたので、これまで経験の無かった回復期・慢性期に取り組んでみたいと思いました」新たな分野に挑戦すべく足を踏み入れた加治木温泉病院で、今現在もその手腕を発揮し続けている。

地域密着型の医療のみならず、より広域に渡った医療にも貢献

全国的に珍しい取り組みに加えICTも取り入れる心意気

加治木温泉病院では、内科や外科などをはじめとする全17の診療科目に、もの忘れ外来やポトックス外来など7つの専門外来を設けており、様々な患者に対応可能。また、回復期病棟を持つ加治木温泉病院はリハビリにも力を入れており、その一例として、全国的にも珍しい義肢装具部門の設立が挙げられる。ここでは常勤の義肢装具士が患者一人ひとりに合った装具を作成している。患者へのリハビリ指導のみならず、「地域リハビリ広域支援センター」では、地域のリハビリ関係従事者に対する研修の実施や、地域住民から寄せられる医療や福祉関係の相談対応もリハビリ推進の一環として行う。「今まで高度急性期の大学病院外科に勤めていたこともあり、なかなかリハビリに触れる機会があり



患者一人ひとりに合わせたリハビリ実践を心掛ける総合リハビリテーションセンター

ませんでした。しかしこちらに来て、リハビリの重要性に気付きました。患者さんに対して隙間のない治療を実践している、という風に感じたのです。疾患の治療は患者にとって人生の一部に過ぎない。治療後の生活まで豊かになるように心を砕く様子は、行動指針でもある「低賞感微」に沿った医療の実践そのものだ。

広域における医療提供という面では、「航空身体検査」の実施も特筆すべきだろう。航空機を操縦するためには国土交通省指定の医療機関で身体検査を受けるよう義務付けられている。加治木温泉病院は2010年に国土交通省の指定を受け、2015年にはアメリカ連邦指定の航空身体検査機関として認定。日本と世界を繋ぐパイロットを医療面で支えている。

地域と日本全体、様々な規模で柔軟に医療の提供を続ける夏越院長。そんな彼は未来の医療の在り方について、「ICTの活用が鍵になります」と予測する。

「ICTを訪問看護や訪問介護、訪問リハビリに応用することで、新たな訪問サービスの開拓期になるのではないかと考えています。例えばICTを応用した、オンラインリハビリのようなサービスです」

近年は核家族化も進んでおり、地方では高齢者の一人暮らしも少なくない。身体機能の低下に懸念のある高齢者たちにとって、通院や施設通所は大きな課題となる。そこでICTを使い、自宅に居ながらリハビリを受けられるようにするというアイデアだ。

その他にも訪問看護・介護、在宅医療における見守りシステムの活用など、いつまでもすこやかな生活の実現を図るべく最新技術への関心も尽きない。

病院を根本から見直す働き方改革

仕事を楽しくしてほしいから、スタッフの意見を大切にしたい

高度急性期病院である鹿児島大学病院と、回復期・慢性期を主軸に置いた加治木温泉病院。2つの異なる病院を経験した夏越院長はそれらの特色の違い、そして共通点を身をもって実感した。「高度急性期と回復期や慢性期では、患者さんの病状や看護師の割合や在院日数など、違う部分もあります。ですが、医療の基本とはどのような疾患であっても患者さんをしっかりと診ること。その基本の考えが変わらない限り、病院の形態が違っていてもやるべきことは一緒だと思えます」と晴れやかに述べる。しかしその一方で「課題もあります」と夏越院長。

以前、同院では患者の様態が急変すれば、夜中でも主治医に連絡して対応するという一人主治医制であった。そこで夏越院長は、土曜日午後、日・祝日、平日夜間は、主治医ではなく日当直医が担当する必要があるれば日当直医から主治医へ連絡をする。あるいは患者さんへの相談・対応などは平日の診療時間内に行く、という方法で医師の働き方改革に着手。また、大学病院在籍時の経験を活かし、インシデント、アクシデントを積極的に報告させ、医療安全を強化。

「起こってしまったインシデントやアクシデントは、報告をきちんと行うことによりスタッフ間で共有し、病院全体の医療の質改善に繋がっていくことが重要です」と、職員全体で患者の安全を守る意識を育てていった。病院の規模は大きくとも、スタッフ一人ひとりの行動や声を拾い上げるのは、夏越院長自身の仕事に対するスタンスの表れともいえる。

「折角仕事をするのであれば、『今日もしんどかった』ではなく『明日はこういうことがあるから仕事を楽しみだ』と前向きに考えた方がいいと思います。そのために、当院でどんなことがしたいかを

スタッフに考えてもらいたい。今の若い人たちは様々なアイデアを持っていますから、ぜひそれを聞いて活かしたいです」病院長という立場であるからこそ、次世代の人材を育成する努力を怠らない。それこそが病院を発展させていく秘訣だ。

「スタッフには多様性があります。なので様々な意見を出してもらいつつも、病院をよりよいものにする」という全員のベクトルは必ず同じにしています」

高齢者から子どもまで、全世代のための医療構想

高齢化が進む現代だからこそ地域住民の力が求められる

加治木温泉病院が位置する始良地区は、高齢者層と若年者層、2つの年齢層が入り交ざる土地。そのため求められる医療ニーズは非常に幅広い。

「患者さんが高度急性期あるいは急性期病院での治療後は、地域の病院がしっかりとその後の治療を引き継いでいく必要があります。そして地域の病院から在宅や施設へ繋いでいく。こういったシステムこそが地域包括ケアシステムです。そして、地域から求められる病院の役割を当院が担うべきだと考えています」このように、患者の状態に合わせて医療と介護を切れ目なく提供できる仕組みを、地域住民を交えてさらに加速させていくのが夏越院長のねらいだ。

「現代は高齢化が進んでいます。それに伴い、これまでの悪性腫瘍、心・脳血管障害に加え、認知症や嚥下性肺炎が増加しています。骨折をきっかけに廃用症候群のリスクが上がる、ということも考えられます。地域で暮らす高齢者の方々のそういった課題に取り組んでいくためにも、我々病院だけでなく、地域住民の皆様と一緒にシステムを推進させていきたいと考えています」



「地域包括ケアシステム」の実現、そしてよりよい日本の医療のために加治木温泉病院は今日も成長し続ける

また、具体的な構想の一例としてこのように語った。「例えば老々介護というものがありませんね。それを少し変えて、地域でボランティアグループを作り、地域の元気な高齢者が病気の高齢者を介護する仕組みを作る、老々支援」というようなことが出来ればいいと思っています」近年、社会では介護施設の人材不足が課題として挙げられているが、もしもこのように地域間のボランティアが活発になれば、介護を必要とする高齢者にとって心強い支援となり、支援する高齢者も生きがいを見つけ元気になるだろう。

「高度急性期・急性期治療は相応の設備を持つ病院で、患者さんの病態に合った治療を受けてもらうべきです。急性期後には、回復期や慢性期といった病院機能の分別と連携が必要になります。ですが最も重要なのは、患者さんの生き方を尊重すること。どんな状態の患者さんであっても、その人らしい生活が送れるように分け隔てなく医療・支援を行っていききたいです」

次世代の加治木温泉病院に向けて計画始動

各医療機関、施設と連携し、地域でトリアージ

病院を単なる医療施設として考えるのではなく、地域という大きな括りの中でも役割を担う存在であると考えている夏越院長。そんな想いを実現させるかのような計画が進行中だという。

夏越 祥次 (なつごえ・しょうじ)

PROFILE

1981年、広島大学医学部医学科卒業。
1990年、鹿児島大学医学部第一外科助手。
1996年、ドイツ・ミュンヘン工科大学留学。
1999年、鹿児島大学医学部消化器・乳腺甲状腺外科講師。
2004年、鹿児島大学医学部消化器・乳腺甲状腺外科准教授。
2009年、鹿児島大学医学部消化器・乳腺甲状腺外科教授。
2015年、鹿児島大学附属病院 副病院長。
2017年、鹿児島大学病院長、鹿児島大学副学長。
2020年、加治木温泉病院 病院長。

【所属・活動】

日本外科学会 特別会員。日本消化器外科学会 名誉会長、名誉会員。日本食道学会 名誉会員。日本胸部外科学会 特別会員。日本胃癌学会 特別会員。日本癌治療学会 功労会員。日本臨床外科学会 評議員。日本胸部外科学会 特別会員。日本消化器癌発生学会 名誉会員。日本リンパ学会 常任理事、編集委員。胃外科術後障害研究会 名誉会長。手術手技研究会 幹事。日本 SNNS 国際学会 世話人。臨床解剖研究会 世話人。食道胃外科フォーラム 世話人。NPO 法人国際食道疾患会議 理事。鹿児島県地域医師育成 特別顧問。メディポリス医学研究所 理事。始良地区地域医療構想調整会議 委員。鹿児島県地域医療対策協議会 委員。日本蛍光ガイド手術研究会 世話人。日本がん転移学会 名誉会長。日本胸部外科学会九州地方会 名誉会員。日本大腸肛門病学会九州地方会 幹事。日本癌局所療法研究所 特別会員。九州内視鏡・ロボット外科手術研究会 名誉会員。

医療法人玉昌会

加治木温泉病院

INFORMATION

所在地 〒899-5241
鹿児島県始良市加治木町木田 4714
TEL 0995-62-0001
FAX 0995-62-3778

アクセス JR 日豊本線「加治木」駅より
徒歩 20 分
南国交通「加治木インター前」停留所
より徒歩 5 分

設立 1978 年

診療科目 内科、腎臓内科（人工透析）、リハビリテーション科、整形外科、脳神経内科、脳神経外科、消化器内科、消化器外科、外科、肝臓内科、循環器内科、糖尿病内科、耳鼻咽喉科、頭頸部外科、皮膚科、泌尿器科、心療内科、歯科、もの忘れ外来、ボトックス外来、頭痛・認知症・しびれ外来、睡眠時無呼吸症候群外来、補聴器外来、禁煙外来、漢方外来、訪問診療（内科・歯科・リハ）・通所リハも実施

診療時間 <月～金> 9:00～12:00、14:00～17:30
<土> 9:00～12:00 <休診日> 日・祝

理念 基本理念 「いつまでも健やかに… — 私たちの願いです」
行動指針 「低賞感微」に沿った医療・介護サービスを提供します。



玉昌会グループ <https://www.gyokushoukai.com/>

医療法人玉昌会
加治木温泉病院 <https://www.kjko-hp.com/>

「実は今、地域のかかりつけ医、そして医療の窓口となるべく、当院を分割する計画を立てています。回復期病棟を中心に、地域包括ケア病棟や慢性期病棟、療養病棟をそれぞれ分割し、各機能の明確化を図った上で、軽度の救急患者を滞りなく受け入れられる体制を作っていく。これを夏越院長は「地域の中で患者さんの状態を確認し、受け入れ先を素早く判断していく。これを夏越院長は「地域の中で患者さんをトリアージできるようなイメージです」と表現した。

近頃は患者を総合的に診断するような医師よりも、ある分野に特化した専門医が活躍している。「そのため、複数の症状を抱える患者は複数の医師にかかる必要があります。これが近年の地域医療、とくに離島・へき地の医師不足に繋がっているとも考えられます。このままだと、地域医療の崩壊が加速的に進んでいきます」と夏越院長。このような現状を打破すべく考案されたのが、この加治木温泉病院分割計画だ。地域包括ケアシステムに基づいたこの構想を実現させるためには、地域のクリニックや他の急性期病院との連携が欠かせない。加えて、日頃から地域の病院、あるいは施設が持つ役割をはっきりさせておくことで、緊急時の患者の搬送も容易になる。

「一人の力だけで出来る医療は限られています。ですがみんなで協働しながら、いい治療、いい支援が出来ればというのが根本にある想いです」

夏越院長の好きな言葉は「水滴石穿」。一滴の水量は少なくとも、それが積み重なればやがて石をも穿つ力になる、という意味の四字熟語だ。

「何もしないで良い結果が得られるということは滅多にありません。だから毎日精進するという生き方はとても大事だと思っています」

これまでも外科手術手技を着実に積み重ねてきた夏越院長。その積み重ねが数々の重篤な疾患という名の石を穿ってきた。地域包括ケアシステムの実現に向けて、加治木温泉病院のスタッフそれぞれが、そして地域住民それぞれが持つ水滴を合わせれば、日本の医療の未来を切り開くことになるだろう。